



会報第10号

発行所
栃木県立
真岡農業高等学校
同窓会

発行人
同上編集部

印刷所
こだま印刷

偉大なり真農高



昭和三年度卒
同窓会長

大倉 一郎

「一郎は長男ですから真岡農学校へ入りたいと思います」けたのが、嬉しい思い出となと進学の受持先生に、依頼されている。

卒業したのが、昭和四年の春、直ちに両親のもとで十年間、農業に精魂を傾け汗水を流した。三人の弟も、私に続いて真農の校門を出た。

戦争、そして敗戦、復員した兄弟には、職もなく失意の毎日がつづいた。国敗れて山河あり。十四人の大家族が同居し、荒野を耕して食を求めた。四人の兄弟が心を合せ起上った。即ち農は国の基なりを信念にした、真農魂だった。

入学試験も二倍強というきびしい入学難だった。合格発表の帰途、大前神社の大木の根元に腰をおろし、同級生三

真農高の限りなき 発展を念じつつ



学校長
岡本 茂

日頃本校の教育に深い御理解と御協力を賜り、感謝をいたしております。

いよいよ、創立八十周年の輝かしい年を迎えることになり御同慶に堪えません。この記念すべき節目に当たり、限

できるようなった。これひとえに、真農高の、大地に生きた喜びと、誇りが心にあったからだと思う。

昭和四十二年三月、栃木新聞社発行の県内高校、校風人脈によると、本校は宇都宮高、大高、宇高、栃高に次いで五番目に紹介された。真農高創立八十周年記念事業に、再

何か参考にならないかと、再読してみた。明治四十一年四月三十日、開校以来の本校の歴史が、二百三十頁にわたって、ほんとうによく書かれていた。芳賀郡を中心に、同窓生の活躍が手に取るように、

名簿は今年三月に印刷が完了する運びとなっており、この名簿によって、懐かしい青春時代がよみがえり、友情を深め、母校愛を一層深めていたゞけるものと期待いたしております。

記念庭園は、校舎の西傾斜約九〇アールを、宇大の関谷先生(校舎周辺の庭園設計者)の設計により、地元同窓会員

である「日本緑化」によって着工されました。できるだけ自然を生かした環境緑化になるように設計されております。従って完成の暁は、全国屈指の環境校となることとあります。

事業費については、同窓会PTAの御援助をいたゞくとともに、折角の機会であるから、より充実した内容にしたいとの希望も多く、さらに一部有志の寄付を仰ぐことになり、目下募金活動を開始しております。

皆様方の御協力によって、必ずや素晴らしい記念事業が実現されることと信じます。この様な盛り上りの中にあって、一方では農業情勢の厳しから、就農者が激減し、農業高校への進学者が漸減し

創立八十周年を 迎えるにあたって



昭和二十七年卒
同窓会常任理事
真岡支部

大滝 弘明

私は真岡西小学校創立十周年記念事業実行委員長として、六十一年十一月二十一日記念式典が終了したばかりであり、母校創立八十周年の意義と重みを殊更強く感ずるのであります。本校の卒業生は一万一千余名を数え、広く社会の各分野で活躍されております。私は五十の坂を越えたばかりですが、眼を地域へ転ずると両隣も又その先もそして組織の役員町市議など、本校の卒業生が多きを数えています。何時の時代でも同窓の諸氏が、芳賀郡市を中心とした産業、行政の要として活躍しており頼もしい限りであります。私は私の学生時代の校長である故小林善蔵先生の教え即ち「諸君は農村のリーダーになれ」又校訓である「今日あるを感謝し最善をつくす」を座右の銘として三十三年来守っています。そして私は母校を何時も誇りに思っています。それは生物を作り育てる心を育む教育を基本としているからであり、緑と太陽と大地即ち大自然を相手に自分の意志をぶつけ誰にも遠慮なく気ままな生活を送れるからです。こんなすばらしい天職が他にあるだろうか。然し本校の長い歴史の流れの中で学校に対する意識が変って来ていると言った方が正確かもしれせん。農業は斜陽産業だ、農業をしていると嫁が貰えないと言ふ。一面ではそれも事実であるが誰かがそんな考えに



なったら日本の農業は跡形もなくつぶされてしまうのではいか、そうなるからでは取返しつかないが、それ等の選択は我々農家のみでなく、広く国民一人一人の意識にかかわっているのではないだろうか。確かに現況のままでは農業を維持せよと言っても無理な事だろう。世界の中の日本農業を考えねばならない時代だからだ。だからと言って一挙に世界に通じる農業には成り得ない、大きな障害を幾つも越えなければならぬだろう。規模拡大の問題、組織化、団地化、資金、税金、権利、法律意識改革など我が国に合った方向を見出すべきであると思う。そして足腰の強い農業をどうしても築き上げて行かねばならぬと考える。私は市街化区域内の農家であるが農業をこよなく愛している。それは大きな流れに抗して言っているのではない。自国の食糧は自分のこの手で作り出す責任があるからであり、作事に喜びを感じるからであります。本校創立八十周年記念事業を契機として今こそ日本農業の存亡をかけて真剣に考える時ではないだろうか。真農高こそ我が母校であり、地域産業の担手育成の場として健全な姿で発展する事を念願せずにはいられないのである。



米や麦類の生産には、最もが主で、米麦は副という農家がほとんどです。

真農高を卒業して三十有余年、振り返ってみると、農業の余りの変化の激しさに驚きます。当時私達は、入学する時も卒業の時も、農業に対して「総兼業化」が進んでいるわけです。農業の将来に見切りをつけた他産業へ就職する若者が増え続けているわけで、時代の流

などたくさんありますが、
一番気に入っているのは、
農業とは何んぞや



物部支部
昭和三十年度卒
上野 静夫

思うこと――

私、三十年前卒業式の前日、達に、こんなことを、云って私達の担任の丹宏先生が、君も、今は、分かっていただけ

益子町塙
昭和二十七年夏卒
小出貫凡

いつまでも若い気取りで五十すぎ
新築の夢がふくらむスキ間風
嫁さんの部屋なし嫁取れとも云えず
働き手三人欲しい農繁期
おれの目の黒い内はと農に生き
預金高哀れ米麦専業家

活動報告

農業クラブの今年を振り返って

顧問 星 速雄

この一年間農業クラブ活動「い」と題して発表なされまふり返って、特筆に値した。発表内容、成果、態度することの第一は日本学校農業クラブ連盟の事務局局長と

県連成人代表の岡本茂校長先生をはじめ、事務局長の野沢先生、農ク顧問の先生方、農ク役員、農ク連盟の運営に、また学校農業クラブの活動、運営に積極的に関与した。昭和五十七年から県連ダッシュを発揮し、会の発展に貢献したことです。手がけたものはすべて自分のものにすることができたことに喜びを感じています。

第二はプロジェクト発表で、関東大会（静岡県）に出場したことです。

稲葉先生指導のもとに農業科三年生の加藤太君他一〇名の生徒諸君が日夜研究に取り組み「種播機の完全自動化につ

第三は農業クラブ主催の各種大会、発表会、競技会において常に優秀な成績を修めました。昭和五十七年から県連ダッシュを発揮し、会の発展に貢献したことです。手がけたものはすべて自分のものにすることができたことに喜びを感じています。

県連事務局として県内のクラブ員一人一人の世話役として、間接的にハンディをもちながら、このような成果を得たことは直接的には真農高のクラブ員が健在である「証」でもあります。

我が校では、家庭科の学習を受ける女子生徒全員が家庭クラブ員になっております。各クラブで、家庭クラブ代表員二名を選出し、その二人は、極力クラブ活動に参加してもらったりしています。それでは活動内容を大御紹介します。

私達の家庭クラブについて

家庭クラブ会長 仁平 幸子

月の職場見学では、石橋町のグンゼに行き下着の出来る工程を見てきました。十月と一月の料理講習会では、調理実習で作れないお菓子類を作り、試食しました。十一月の学校祭には、バザー、作品展示、研究展示を行い、多くのお客様に見ていただき、特にバザーでは、私たちが手作りのバックをたくさん買っていました。三月末には学校内にある報徳寮で三団体合同研修会がおこなわれます。これは一年間の計画をたてるだけでなく、役員同士の親睦をはか

まず五月の花いっぱい運動とクリーン運動では、報徳寮校舎を中心に学校全体の美化につとめました。六月には施設訪問で「大案園」を訪ね、おみやげに手作りのお菓子と野菜をもって行きました。八

生徒会活動を振り返って

生徒会長 加藤 太

本年度の生徒会活動は、新入生を迎えてからの部活動紹介で幕を開け、続いて球技大会、体育祭、学校祭など、その他数々の活動をしてまいりました。この一つ一つの活動

本年度の生徒会活動は、先輩の方々はこの真農農業高等学校の発展を願って卒業されたことと思います。ですが、発展させるどころか、今の生徒会に比べてみると、正反對のことをやっています。また、私たちが、いつも、いままでは違った全校生徒が力を合わせて、なにか一つのことを出来るような活動はないものかと考えていました。生徒会に慣れるまでに時間がかり、慣れたかと思うと新しい仕事が入ってきたり、考えてはいたのですが、結局計画も立てられず、本年度の生徒会活動も幕を閉じようとしています。それでも例年行っている行事の中で、この思いで形式を変えられたものがあります。それは、体育祭でした。



本年度は、何も出来ませんでした。何事も一つ一つ実行して、いくつ来年度生徒会に引き継ぎたいと思います。

本年度は、何も出来ませんでした。何事も一つ一つ実行して、いくつ来年度生徒会に引き継ぎたいと思います。

青年部活動について

青年部長 青木 良雄

青年部は組織活動としての性格を失い、行事そのものをやるか、あるいは、一人一人のねがいや要求を、現実の生活を正しくとらえていくこと、からには、平平凡凡な生活でも最も大切なことも、内には、一人一人の胸のなかにおもてにあらわれない本質的な要求を引きだし、同窓生としての進歩道しるべを見い出さなければなりません。いつの時代にも、同窓会に青年部があればこそ、その観を抱けるよう努力していきたいと思

若い同窓生達のもの考え方、行動のしかたも随分変わってきています。以前、高校をでたという学歴は今では、ふつうのことになってしまし、農村に住んでいても動機にでているものが年々増え、農業をやろうと思っているものは、将来の経営や技術が日々変化を、現状とはすっかり違った姿になることを感じているはずで、比較的心のうすかった政治や経済、生産や消費の動きも決してひとごとではなくなっています。

これら若年世代をとりまく環境の移り変わりが、考え方、行動のしかたを大きく変えてきていることに疑いの余地はありません。



創立八十周年記念事業の成功を期して

明治四十一年四月開校以来、上し、本会基本金並びに、P TAからの支出の他に、二〇〇万円の篤志寄付（募集期間六十二年五月三十一日まで）をいただき、この篤志寄付は、昭和五十九年五月二十五日、本会並びにP TA・学校合同の発起人会が開かれ、実行委員会が結成されました。

早速同窓会名簿の作成に着手し、併せて五十九年十月より数回にわたる実行委員会の結果、後記の記念事業を行うことになりました。

総額八〇〇万円の予算を計

本校は明治四十四年四月、野で活躍されております。現在、特に芳賀郡市の農村指導者の養成を目標に栃木県芳賀郡立農林学校として誕生し、以来七十八年の歴史を重ねて今日に至っております。この間、県立移管、大野原農場の開校、定員増、校名の変更、学

さて、いよいよ昭和六十二年四月には創立八十周年を迎えることになりましたが、この機会に八十の輝かしい歴史を回顧し、先人の偉業をしのび、共に建学の精神を再認識し、将来に向かって躍進の足場を確立し、真に国家・社会の求める社会人、産業人育成に力を尽くさねばならないと存じます。

ここに、八十年の節目を記念して、その足跡を残すべく、創立八十周年記念事業実行委員会を結成し、下記のとおり記念事業を行うことになりました。特に庭園整備については、全日本学校環境緑化コンクール特選に輝いた本校に

とって、永年の懸案であった西斜面の一部を庭園に仕上げ、学校全体の環境緑化を完成しようとするものであり、極めて意義深いものと確信いたしております。

つきましては、今後物心に亘り各位に特設の御支援を仰がねばなりません。何卒この趣旨に御理解と御賛同を賜りますようお願い申し上げます。

創立八十周年記念事業内容

一、記念式典
二、庭園の整備
三、記念誌の発行
四、同窓生名簿の発行

昭和六十一年一九八六年の幕があがった寅年、変化多き年ともいわれる。さてどんな年になるのやら、輝かしい歴史と伝統の中に生きている我々の母校真農高の創立八十周年を、昭和六十二年四月三十日に迎えることになりました。人間の年令で云うと、長寿を祝う「傘寿」にあたることを記念すべく幾多の事業が計画されている。我が同窓会も学校当局、P TAと相提携し、これが成功に向けて懸命の努力をいたしております。「虎は死しても名を残す」後世の爲にも立派な教育環境を残していきたいと思

止みません。原稿をお寄せくださった方々に心からお礼申し上げます。

編集後記

昭和六十一年一九八六年の幕があがった寅年、変化多き年ともいわれる。さてどんな年になるのやら、輝かしい歴史と伝統の中に生きている我々の母校真農高の創立八十周年を、昭和六十二年四月三十日に迎えることになりました。人間の年令で云うと、長寿を祝う「傘寿」にあたることを記念すべく幾多の事業が計画されている。我が同窓会も学校当局、P TAと相提携し、これが成功に向けて懸命の努力をいたしております。「虎は死しても名を残す」後世の爲にも立派な教育環境を残していきたいと思

